

# アフリカから 見えてくること

石 弘之 (北海道大学教授)

聞き手／高橋孝輝 (サイエンス・ライター)

## 苦悶するアフリカ

—— 昨年2月、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)など温室効果ガスの排出削減義務を定めた、いわゆる「京都議定書」が発効しました。種々議論はありますが、その発効が環境保護という考え方を次に進めるものであることだけは明らかなように思えます。では、環境保護は今後どの方向に向かうのか。この30年、世界を飛び回しつつ環境について考えていらっしゃった石さんに、おうかがいしたいと思います。

糸口としてまず「アフリカ」という切り口からお話いただけませんか。

石さんは昨年4月、環境問題に限らずアフリカという地域が抱えているさまざまな問題を、「子ども」という存在を中心に置いて俯瞰された『子どもたちのアフリカ』(岩波書店)という本を上梓されておいでです。これはやはり、2002年から04年までお務めだったザンビア大使としてのご経験が元になっているのですか？

石 私はこれまで4回アフリカで働いていまして、最初は新聞社の特派員として、2回目は国連職員(国連環境計画)で、3回目はアフリカのいくつかの大学の客員教授としてというもので、大使としての赴任は4回目になります。ですからあの本は、ザンビアでの経験ももちろん含まれていますけれども、



過去30年間で4度のアフリカ体験を大成したものなのです。

アフリカの子どもの現実とデータを詰め込みましたが、あの本で私が言いたかったのはただ一つのことなんです。アフリカは日本から見ると非常に遠くて、貧困と飢餓でかわいそうというイメージがある。そして「そんなもんなんだ」とヘンに納得してしまっているところがある。しかし現状はもっと根が深くて、もう「かわいそう」とか「悲惨」というレベルすら通り越しているし、「そんなもの」じゃないのだということを言いたかったんです。そのことをデータとともに示して、日本の人々に揺さぶりをかけたくて書いたというのが正直なところですね。

## 社会崩壊をもたらしている エイズ

—— たしかに一読して、現実のあまりの重さに「揺さぶられる」感じがしました。  
石 アフリカはひと括りにして語るにはあまりにも広大で、しかも多様性に富んだ地域ですから、全部が全部そうだと思われても困るのですが、エイズのため中には「社会崩壊」のレベルにまで達している地域もあります。

たとえば、大陸の南東部にある、マラウィという小さな国。飢餓が深刻な状況にある国として知られていたのですが、2005年にはひどい干ばつに襲われて状況がさらに悪化しました。ただ、干ばつ

の被害以上に飢餓を作り出している理由として、エイズで働き盛りの人々が激減してしまったことが挙げられます。アフリカの農村における農業労働は一般に苛酷なものです。それを支えてきた20代、30代の層がエイズでスポッと抜け落ちてしまったものですから、農業そのものが疲弊してきている。なんとかトウモロコシなどを作っても、60キロ入りの袋を担いで、トラックが集めにくる道路まで運んでいくことができない。出荷できないから現金収入もなくなり、食べるものは豆とかイモといった、自給できるものばかりとなってしまう。

ですからたとえ干ばつが収まっても、そう簡単には農業も回復しませんし、飢餓の問題も解決しない。エイズ禍が激しいアフリカの国々で、同じことが言える

でしょうね。

それから、ザンビアで言う毎年学校の教師が2000人ぐらい、全体の5%ほどがエイズで死亡しています。教師の感染率が非常に高く、学校教育をも崩壊させかねないのですが、その先生がまた女子学生たちに感染させるんです。モラルがまったく違いますからね。そのため若い10代の女の子の感染が増えています。

—— なにか、聞けば聞くほど暗くなってくる。

石 アフリカの人々自身はそれでもけっこう明るいのですが、状況は真っ暗ですね。

### 薬が手に入っても……

—— たしか2000年には、アフリカ諸国など貧しい国向けのエイズ治療薬の価

格が、約5分の1に引き下げられました。今の薬では治癒せず、あくまでも発症を抑える効果しかないのですが、その薬価引き下げの効果は現れていないのですか。

石 効果のある国とない国に分かれていますね。

南アフリカ連邦、ナミビアなど、経済水準が比較的高い国では薬の入手が容易になりましたが、隣国のレソト、スワジランドといった世界最貧国のようなレベルの国々では、まだ薬の入手は困難だと思います。また、たとえ薬が入手できても、その前に、何種類もある薬を毎日決まった時間に確実に飲むという習慣を作らなければいけない。さらに免疫力を調べて薬の組み合わせを決めるため、年に3～4回は病院に通わなければいけない。病院だって近いとは限りませんから

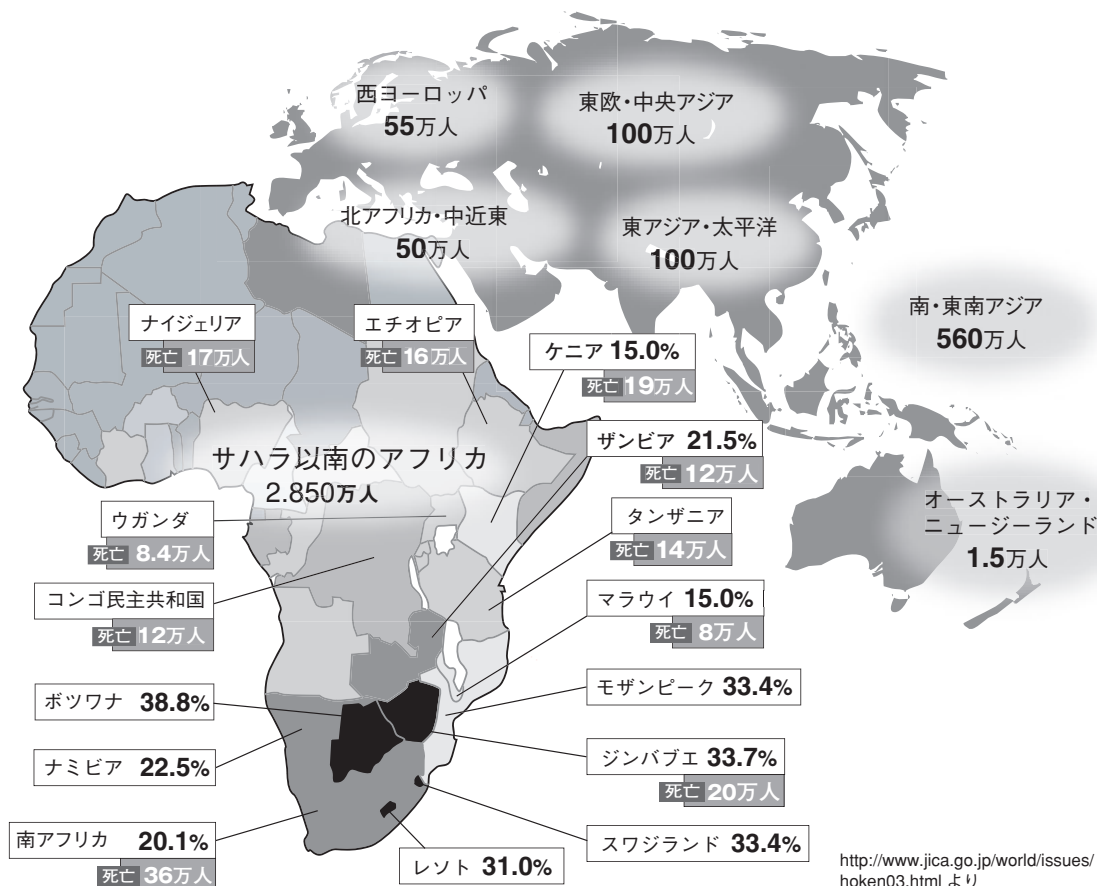
ね、それが難しいのです。

薬代は、ジェネリック\*<sup>1</sup>と呼ばれる薬で1日分が1ドル前後。年に360ドルの他に検査代が1回30～40ドルはかかりますから、年に400～500ドルは治療費がかかることになる。アフリカでも、エイズ流行地の人々の標準的な年収は200ドルから300ドルほどですから、個人で支払うことは不可能です。

—— 感染率は、アフリカ東部のケニアあたりから南部の国にかけて高いですね。

石 サハラ以南の国々は、基本的に同じ状況にあると言ってい

図表1 アフリカ諸国のエイズ感染率



<http://www.jica.go.jp/world/issues/hoken03.html> より

いと思います。ただ、ケニアからザンビア、マラウイ、タンザニアといったアフリカ大陸の東部から南部にかけては、感染性の高いタイプの変異株が流行していて、より深刻な状況にあります。エイズは、先進国中で唯一患者が増えている日本にとっても大問題なのですが、アフリカにとっては、「宿痼」と言っているだけではすまされない段階にきています。

## 残存する奴隷文化と女性虐待

—— 女子割礼や子ども奴隷、少年兵といった問題は どうでしょう？

石 女子割礼とはもう言わず、FGM (Female Genital Mutilation)、女性性器切除という言い方をするようになっていきます。性器の一部を切り取ったり縫い合わせるという行為が、なぜ現在まで残されてきたのかとも思いますが、すでに2000年間もの時間を積み重ねてきた慣習で、なかなか簡単にはいかない問題になっているのです。

子ども奴隷や少年兵の問題も、FGMと同じような意味で難しいですね。

奴隷というのはアフリカに内在する文化的な、というか、マイナスの文化的な現象で、そもそも15世紀に奴隷貿易が誕生したきっかけは、まず現地民の間での部族抗争でした。勝った方が負けた方を奴隷化する。そこにアラブ商人が来て買い取り、東部や西部の海岸に運び、ヨーロッパの奴隷商人が新大陸などに輸出し始めた。それが1880年前後まで続いたわけですが、それから120～130年経っている現在でもなお、アフリカ大陸には奴隷売買というものが、厳然として存在しているのですね。

私がスーダンで雑用を頼んでいた、とても優秀で気の利く少年に、半分冗談で「日本に連れて帰りたいなあ」と言ったことがある。すると、「うん、親に100ドルも渡せば大丈夫だと思うよ」って、笑顔で応えるんですよ。



石 弘之(いし ひろゆき)氏

1940年東京都生まれ。朝日新聞記者を経て東京大学大学院教授、駐ザンビア大使を歴任。現職は北海道大学公共政策大学院教授。その間、国連環境計画上級顧問、東中欧環境センター理事などを兼務する。専門は環境学。『地球環境報告』(岩波新書)など著書多数。

親が平気で子どもを売り、子どももまた親のために売られることを容認する。そういう文化の存在が、アフリカにおける奴隷問題の解決を難しくしているのです。モーリタニアでは、植民地時代には奴隷輸出がほとんど唯一の産業で、1980年代まで公然たる奴隷制度が存続していたわけですが、今でも奴隷市場があると云われる。スーダンでは、奴隷にした北の方のアラブ系民族と、奴隷にされた南の方の黒人系民族との争いが、内戦状態の基本的な背景になっている。怨恨の世界でもあるんです。

## 文明論、文化論的な対立状況も

—— たとえば、国連など外部からの強い働きかけでは解決しない？

石 異なった歴史、文化を持った人々に、グローバルな倫理を押しつけてもうまくいくのか——ということがあって、難しいでしょうね。

アフリカの街は近代化していて、高層ビルもたくさん建っていますから、皆

それを見てアフリカもずいぶん豊かになり、グローバル化が進んでいると思い込む。しかし一歩農村に入ると依然として貧しく、植民地時代と変わらない生活が続いています。

たとえば、医者と言えば西洋医学を学んだ医者より、いわゆるウィッチドクター(呪術医)のほうが多いという状況がある。エイズにかかると、処女と交わると治るという迷信がはびこり、幼女強姦が行われるといったことまであるわけです。これも呪術医が広めたと言われていますが……。

ただ、それを我々が、野蛮で因習にとらわれた行為じゃないかと批判しても、問題の解決にはなかなか結びつかない。必ずと言ってよいほど「西欧の価値観だけが正しいという文化帝国主義だ」という反論が返ってきます。FGMなど女性に対する虐待についてすら、アフリカ人男性はもちろん、女性からも反論が返ってくるのです。

一方、先進国側では「人権は国や民族、地域の枠を超えて追求されるべき人類の



根源的、普遍の原則だ」とする人権至上主義的な考えが根強い。他方で「各国、各民族、各地域に固有の文化を尊重すべきだ」という、文化多元主義的な考え方もあります。

少なくともこの20年間は、事態はあまり改善されないまま、そういう考え方が三つどもえ、四つどもえになって争われているという状況だと思います。

—— どうも言葉を失ってしまいます。「環境」という切り口でもそうなのですか？

## 環境問題から見るアフリカ

石 まず地政学的な意味で、アフリカは非常に困難な状況にあります。

気候や自然環境は農業にも生活にも厳しいものですし、一部を除いては一般に土地がやせています。砂漠、乾燥サバンナはもちろんなんですが、熱帯林が茂って一見豊かに見える土地でも、熱帯土壌という表土が薄くて栄養分の少ない土地なのですね。

しかも農業に適している土地の多くは、植民地化に伴い輸出用商品作物のプランテーション(大農場)として囲い込まれてしまっている。日常の食用作物は本来は農地に適さないやせた土地で作られていますから、収量は限られている。

そこに人口爆発<sup>\*2</sup>が来ましたから、飢餓や貧困という問題が発生します。そこで国際援助が始まりますが、1960年代に東西冷戦の草刈り場になったという事情などから、問題の根本的な解決にはあまり役立たず、援助の常態化という事態を招く。現在では、ならすとアフリカ経済の半分は、援助で支えられているのではないのでしょうか。

援助は一方で、アフリカの主食穀物を以前のヒエ、粟から、トウモロコシや小麦といった援助で得られる穀物に変えてしまった。どちらもアフリカでは栽培に適さず、雨量が少ないとたちまち不作に



高橋孝輝氏

なります。ただ、おいしいので味になじんでしまい、ヒエや粟には戻れない。そのため、伝統作物は栽培されなくなり、さらに援助の食糧に依存するという悪循環から抜け出せなくなります。

—— 気候条件と歴史と政治が一体となって現状を作り出している、というわけですか。

石 おっしゃるとおりですね。

—— すると、アフリカにおける最大の環境問題というのは……。

石 いわゆる「環境収奪」と呼ばれる問題ということになるでしょう。

たとえば木材の違法伐採とそれによる密輸出。特に森林資源の豊富な西海岸では目に余るものがあり、国によって木材輸出の半分が違法とも言われています。すでに野生動物の急減、洪水の増加などの問題が指摘されており、主な密輸出先のEUなどが厳格な対策を講じないと、さらに環境の荒廃が加速すると思います。

アフリカにおける環境収奪というと、かつては象牙やサイの角などを得るための動物狩りが問題になっていました。アフリカ象の生息数がかつての10分の1になったことについては、象牙消費国だった日本にもかなりの責任がありますが、現在の問題は、ゴリラやチンパンジーの生息数の急減です。これは、人間に食べられ続けていることが主要な理由

だと考えられている。なにしろアフリカでは、たんばく質の全摂取量の約4割をブッシュミートと呼ばれる野生生物、つまり小はカタツムリなどの昆虫から大は象、キリンにいたるまでの生物によって得ているわけですからね。

—— 「地球温暖化」については？ 環境問題には、先進国とアフリカ諸国に代表される開発途上国との「南北対立」という枠組みもあると思うのですが……。

石 アフリカでは、かつて東南アジアや中南米で問題になったような、先進諸国からの工場進出による公害輸出といった、非常に南北性の高い問題はまだ少ない。ただ2003年末のスマトラ沖地震の時に、ソマリアで有害廃棄物の違法投棄が明るみに出ました。津波で、海岸に捨てられていたヨーロッパの国のゴミが流れ出して、判明したのです。

温暖化に関しては、もちろんアフリカにも及んでいるわけで、キリマンジャロなどの氷河が急速に縮んでいるという事実はあります。しかし、たとえばアフリカの過去200年間のCO<sub>2</sub>排出量は世界全体の1%にも届きません。現在は世界の3.5%ですが、日本は1国で4%ですから、アフリカ53カ国は日本1国にも及ばない。なのに被害を受けるわけですから、南北性の高い環境問題の1つですね。

## 限られた有効性の中で

—— “苦悶するアフリカ”に対する、有効なアプローチとはなんのでしょうか。

石 結論を先に言ってしまうと、ないですね。

—— ない？

石 問題を根本的に解決する方法は、ありません。

アフリカの現状には、植民地時代からの収奪で発展が足踏みしているところから始まった、第二次大戦後の人口爆発が大きいのしかかっています。逆に言うと、

人口増加が落ち着けば展望も拓ける。が、世界的に見ると人口問題は一時に比べて沈静化の方向にあります。南アジアとアフリカの人口増加が止まりません。南アジアではそれでも、最大人口国インドの著しい経済成長もあって少し先が見えてきた<sup>\*3</sup>のではないかと考えられますが、アフリカはその意味でも取り残されているのです。

そのアフリカの現状というのを、ちょっとデータで見てみましょうか。

開発途上国の中でも特に遅れた国を「後発途上国(LDC)」と呼ぶのですが、2005年2月現在、50カ国あるLDCの中の34カ国がアフリカです。それから国連開発計画が、世界各国の1人あたりGDPや平均寿命、就学率などを元に算出した「人間開発指数(HDI)」という数字があるのですが、その下位25カ国はすべてアフリカの国ですね。さらに5歳未満の乳児死亡率ワースト25のうち24カ国がアフリカ。栄養不足人口が33%もいるというのは世界最高、就学率42%は世界最低……。

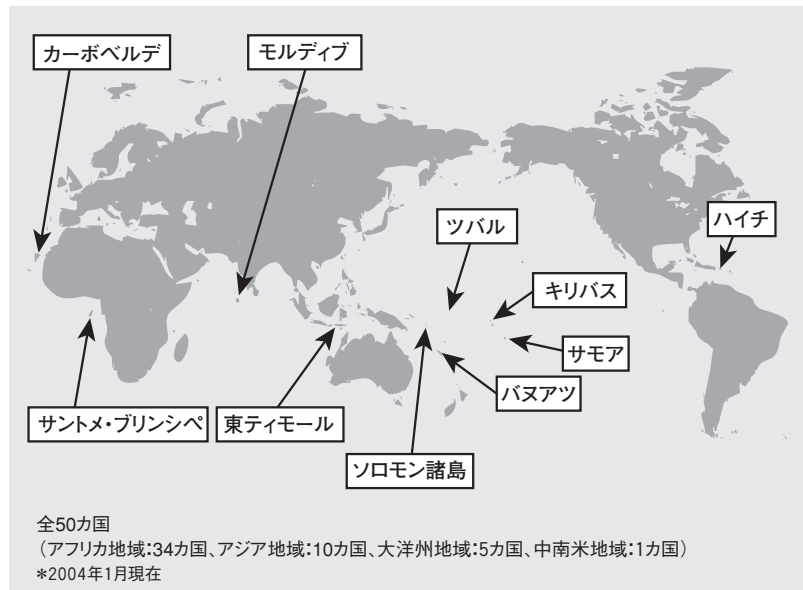
過去40年間、国連をはじめさまざまな組織やいろんな人々が、「ああすればいい」「こうやれば改善される」と支援してきたはずなのに、ほとんど改善されていない。

一方で、アフリカの兵力は過去15年間で1.5倍に増強されています。ザンビアの独立記念日には、戦車の大行進があり、上空には戦闘機が何十機も飛び回っていましたよ。地上にある貧困の上を飛ぶ、イギリスの中古とはいえ1機何億円もする戦闘機。アフリカを象徴する光景でした。

結局、アフリカ人自身の意思が反映されていない、「くれてやる」、「何でももらいます」の従来型援助ではどうしようもない。そのことを、まず認識しなければなりません。

その上でですね、優先順位を付けると

図表2 世界のLDC分布図



<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/lcd/q2ex.html> より

すればそれは「子ども」しかないと思って書いたのが、『子どもたちのアフリカ』という本だったわけです。

先進国の間では意外に知られていない数字なのですが、エイズ孤児は現在すでに1100万人、2010年には2000万人になります。数年のうちに900万人も増える孤児のうち、大家族制度の中で吸収されるのはせいぜい2~3割でしょう。ザンビアの日本大使館で働く現地人職員に尋ねると、大部分の人が親戚のエイズ孤児を数人も預かっていました。もういっぱいいっぱいなんですね。親戚で面倒みきれない子どもがあふれ出してストリートチルドレンとなり、行く末は少年兵、奴隷、セックスワーカー(売春婦)となっていく。ですからその子どもたちを何とかしなくちゃいけない。最低限の教育を受けさせ手に職を付けさせて、将来何とか自立させたいと思ったのです。

—— アフリカはそれほどギリギリのところに来ている。石さんの言葉の1つひとつで、アフリカは「そんなものだ」という意識を削ぎ落とされた気がします。同時に、「環境問題」に引きつけて言うと、

それが文化や歴史、社会、政治といった複数の枠組みから構成されており、その前提で議論しないと普遍性を持ち得ないということも、このアフリカという切り口から見えてきたと思います。ありがとうございました。

アフリカを離れて、では京都議定書の発効、温暖化そのものについてはどうなのか。そのお話は次号でおうかがいしたいと思います。

(いし・ひろゆき)

(たかはし・こうき)

写真/円山幸志

注

\*1 ジェネリック

普通は特許切れで安く売られる薬を指すが、エイズ薬では特許料を支払わないため安く売られる薬を意味する。ブラジルやタイの製薬会社が製造し、欧米の開発元の製薬会社の10分の1近い値段で販売。ノーブランドともいう。

\*2 人口爆発

人口がそれ以前の水準から急激に増加すること。人類史的には農耕開始、産業革命などを契機に何度も起きてきたが、ここでは医薬品の普及などによる乳児死亡率の低下を背景とする、アフリカでのここ半世紀ほどの増加を指す。

\*3 経済成長もあって先が見えた

一般に、経済成長があり所得が向上して高原状態に達すると、子どもの出生率が低下して人口増は頭打ちになるという説があり、現代では日本、シンガポール、台湾、韓国などでその説通りに推移している。